

ホワイトハウス見学ツアー



先日、BSテレビで米映画「エンド・オブ・ホワイトハウス」を観た。北朝鮮のテロリストが、ホワイトハウスを占拠するという荒唐無稽なストーリーだ。その銃撃戦の場面をみて、「あ～、ここだ！」と幾度もうなずいた。じつは私は、ホワイトハウスを訪れたことがあったからだ。

昭和61年（1986）、ワシントンD.C.でIADR開催中の3月13日。クリスチャンセン・グラフ・ナカハラのトライアングルにより、ミシガン大学、ベルン大学、日本歯科大学の合同姉妹校調印式が、D.C.にある在米スイス大使館で催された。ベルンのハンス・グラフの親友が、大使をつとめていたのだ。

同日の夕刻、私たちは大使の手配により、思いがけずホワイトハウスの見学ツアーにでかけた。夕闇に白亜の殿堂が浮かぶなか、私たちは一般市民にならないでアッサリ門衛を通った。聞けば、建物の左右側の東棟と西棟が同じ造りになっていて、何ヵ月かおきに交互に開放して、市民に館内を見学させるという。道順はきまっていたが、市民は普段着で気さくにガヤガヤと館内を巡った。

廊下や階段には、各国の国賓や要人を写した額が隈なく飾られている。つい自国の首相の姿をさがしたが、（当時、ロン・ヤスの蜜月時代だったが）、見落としたのか一葉もみつからなかった……。ほんとうにロン・ヤスカあ？

歴代大統領の肖像画を飾る厳かな室を通り、整頓された大統領執務室に入った。世界のスポットは、さほど広くなく、汚れもめだって、人間くさい室だなあ、と微妙な気分だった。

写真は、あのお馴染みのエンブレムを背にした記者会見場。左から古屋英毅教授、ベルンのH.インガバル歯学部長、ハンス・グラフ教授、私、ミシガンのR.C.クリスチャンセン歯学部長。

私と小倉英夫助教授（当時）は、ベルン郊外のアーレ川に面したハンスの瀟洒な私邸に招かれたことがある。小倉君は、その後病いに倒れたハンスの病床を見舞った。ハンスとは毎年、年賀状を交わしていた。先日（2015年）、5月17日に81歳で亡くなった、と子息から訃報が届いた。30年来の親しい友人の死去であった（本稿は、訃報の1週間後に記した）。